

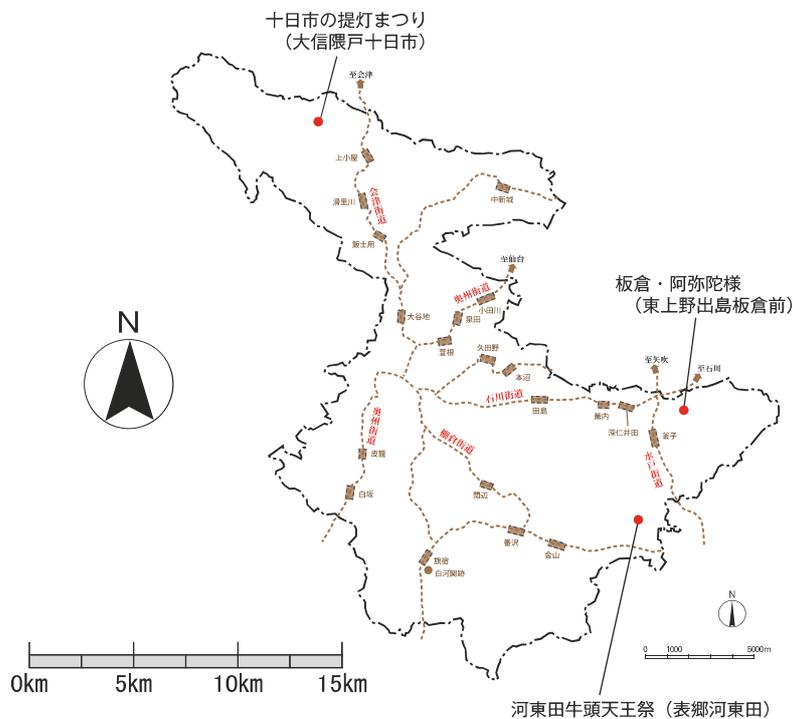
V. 街道集落の年中行事・祭礼にみる歴史的風致

1. はじめに

白河は、奥州街道や白河・会津街道、棚倉街道、石川街道、水戸街道など複数の街道が交錯している地域である。これらの街道沿いには、宿場が設けられ人と物とが行き交う場所として整備されるとともに、その周囲の地域も宿場を支える役目を担った。宿場を中心とした地域には、いまでも各地域で伝承されてきた様々な年中行事や各神社での神事に伴う祭礼が多く残っている。

本市における年中行事・祭礼は、江戸時代後期のように2つの史料によってうかがい知ることができる。屋代弘賢からの『諸国風俗問状』に対して、松平定信に仕えた駒井乗郵が答えた『奥州白川風俗問状答』（文化14年（1807））で、当時の白河藩領の年中行事や祭礼などの風俗について記されている。また、地誌である『白河風土記』には、白河藩領の寺社仏閣や小祠に関する記載があり、祭礼日や祭神についても記されている。これらの記録と現在の行事とを比較すると、時代の変化にあわせて少しずつ変化しながら、現在まで伝承されていることがわかる。

これらの年中行事・祭礼のなかには、街道集落のまちなみを背景に行われ、歴史的風致を形成している事例がある。その代表的な事例として、「河東田の祭礼・行事」や「十日市の提灯まつり」、「板倉の阿弥陀様」がある。



■ 街道集落の年中行事・祭礼

街道集落の年中行事・祭礼の位置関係

第2章

(1) 奥州街道 (奥州道中)

江戸時代、幕府が重要な地域を結ぶ道「五街道」(東海道・中山道・甲州街道・日光街道・奥州街道)のひとつで、江戸と白河とを結ぶ街道である。正式には、日光街道と分岐する宇都宮から白河までを指し、幕府道中奉行が直轄管理する。ただし、一般的には、幕府の管理ではない白河以北の仙台区や松前道も含めて奥州街道と呼ぶことが多い。白河を通るルートは、下野国との境である境の明神(市指定史跡)から入り、白坂宿・皮籠村・小丸山を経て、小峰城下に九番町から入り、城郭の南側から東側をカギ型に通り、阿武隈川を越えて城下を抜け、会津街道と分岐し仙台方面へと向かう。

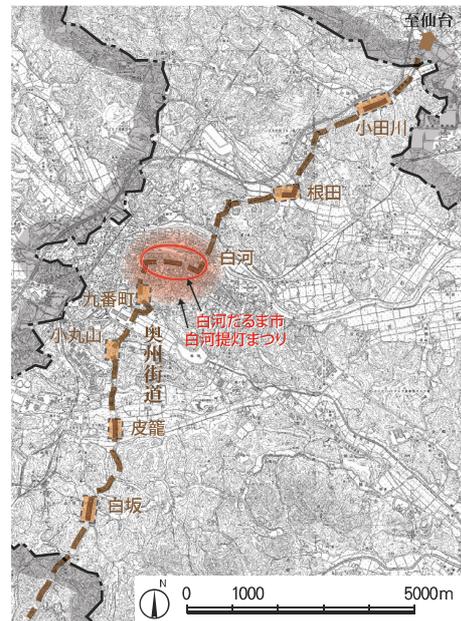
道沿いには白坂宿・白河宿・根田宿・小田川宿が整備されるなど、白河の町は、政治・経済の地のほか、交通の要衝としても賑わいをみせていた。

(2) 白河・会津街道

白河と会津若松を結ぶ街道で、会津から長沼を経て、白河の奥州街道に合流する。参勤交代にも利用され、会津藩主をはじめとして越後国の新発田藩主、村上藩主などの参勤交代にも使用されていた。

白河から会津までのルートは、奥州街道から分岐する女石から大谷地―二枚橋―飯土用―滑里川―上小屋を通り、安養寺―牧ノ内(西白河郡天栄村)―長沼(須賀川市)を経て勢至堂峠を越えて会津に至るもので、参勤交代の交通路や佐渡金山の金の輸送、会津藩の物資輸送などに利用され、五街道に次ぐ脇街道として重要視されていた。

令和元年(2019)10月29日、文化庁の「歴史の道百選」に追加選定された。



奥州街道 (奥州道中)



白河・会津街道

(3) 棚倉街道 たなぐらいどう

白河から表郷地域を經由し、棚倉へと向かう棚倉街道は、中世から近世にかけて、政治の中心であった白河に向かう脇街道として整備されたものである。白河から棚倉へ向かう桜町さくらまちの東はずれに道が二手に分かれる箇所があり、この分岐点を右に進み、八竜神はちりゅうじん合戦坂ごうせんざか—上ノ原うえのほら—郷渡ごうど—谷中やなか—社田やしるだ—番沢ばんざわ—金山かねやま—梁森やなもり—高木たかぎ—三森みもり—下羽原しもはばら—逆川さかさかわ（東白川郡棚倉町）を通り棚倉中心部に入る。



棚倉街道

第2章

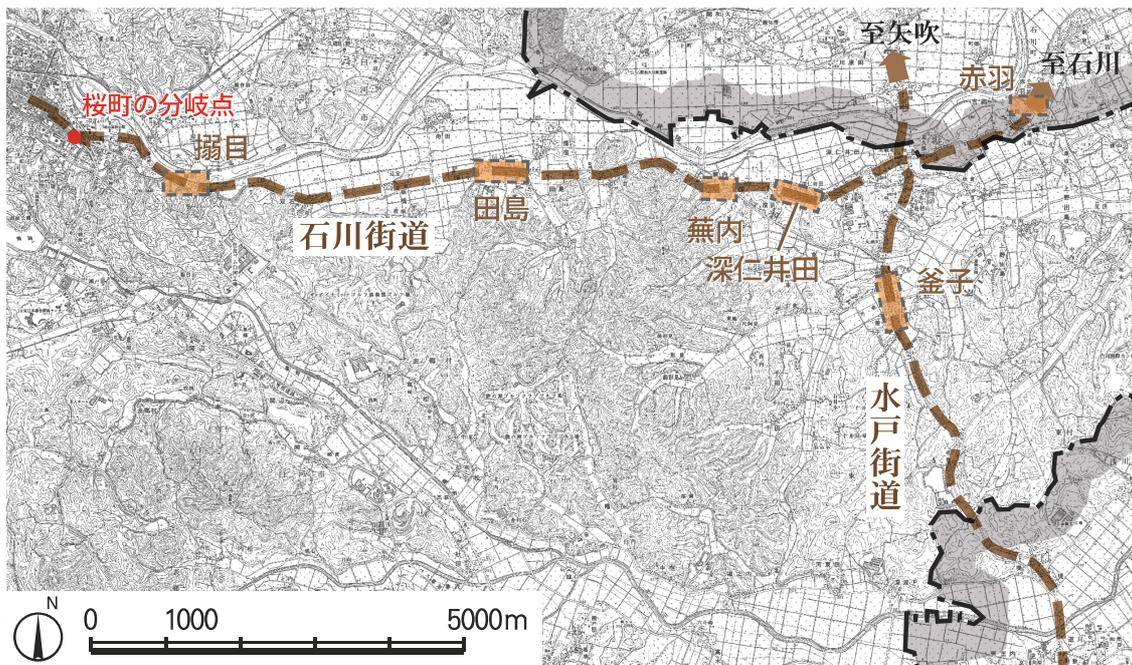
(4) 石川街道

棚倉街道で記した桜町の分岐点を左に進み、^{からめ}搦目を通り、^{たじま かぶうち ふかに いだ かみの}田島―蕪内―深仁井田―上野^{でじま あかばね さわい}出島―赤羽・沢井（西白河郡石川町^{いしかわまち}）を通り、石川に至るルート^{かまのこしゆく}を石川街道と呼んでいる。上野出島を含む東地域には、後述の水戸街道の釜子宿があり、2つの街道が交差する地点として、多くの人が行き交った。

(5) 水戸街道

水戸街道は、奥州街道の脇道として江戸と東北をつなぐ幹線道路である。白河藩の支配下にあった奥州道中の^{やぶきしゆく}矢吹宿（西白河郡矢吹町）の南端、^{なかはたしんでんむら}中畑新田村から分岐し、^{なかはたむら}中畑村（^{かまのこむら}矢吹町中畑）、^{かまこ}釜子村（東釜子）を通り、棚倉城下を経由して水戸へと向かう。

東地区は、水戸街道と石川街道の交差する場所であり、釜子には宿が設けられた。



石川街道

2. 各街道集落における歴史的風致

2-1 河東田の祭礼・行事にみる歴史的風致

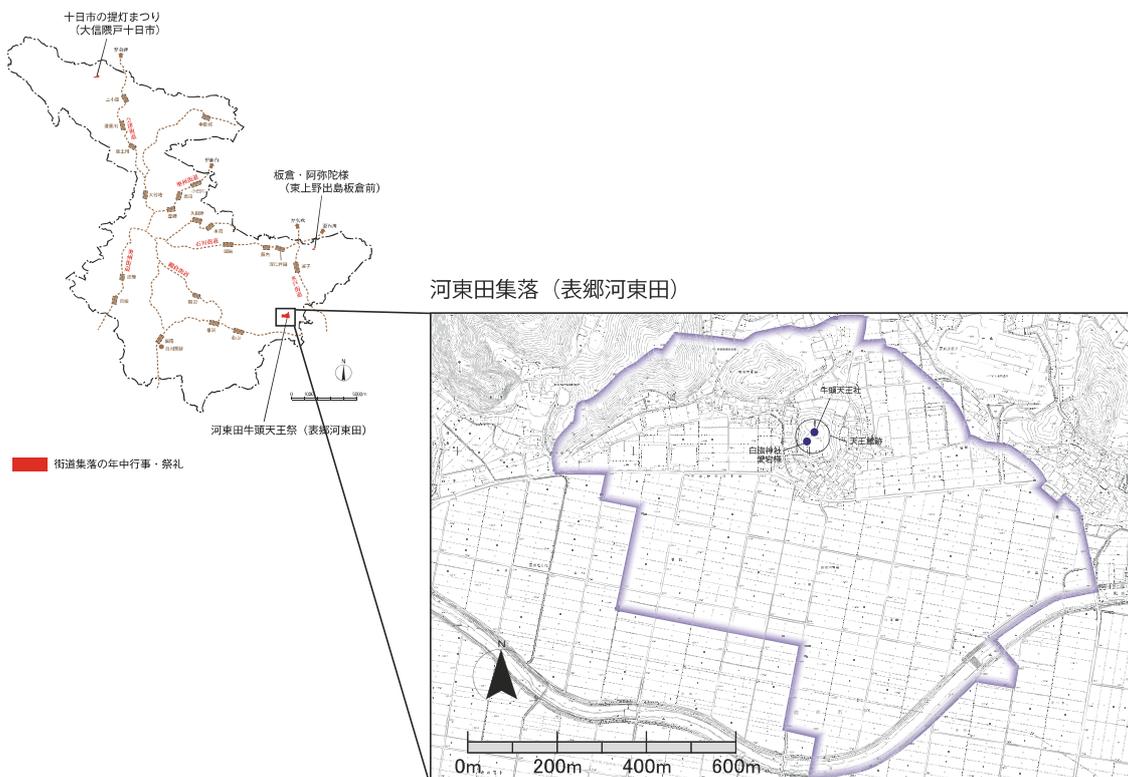
(1) 河東田集落の沿革と概要

河東田集落は、天王館跡と呼ばれる中世の城館跡を中心に広がっている。この城館は、中世に白河を中心とした地域を治めた結城顕朝の次子・朝重の流れを汲む重継が築城したとされている（昭和15年（1940）建立「河東田城址碑」）。

河東田集落は棚倉街道と並行して流れる社川の下流北岸に位置し、天王館跡を囲むように集落が形成されている。その地名や領主の名は、室町期の文書にも確認でき、応永35年（1428）3月10日『結城白川氏朝判物』（秋田藩家蔵文書加東田文書）には「賀東田」の地名が見える。

河（賀）東田氏は、結城家の重臣だったと考えられ、白河結城家における年中行事とその役割分担について記した『結城白川氏年中行事』（東北大学保管白河文書、『白河市史五』所収）にも、「河東田弾正」の名が見える。その後、常陸の佐竹家が北に勢力を伸ばし、天正3年（1575）、白河結城家の所領が佐竹家の管理下に入ると、河東田河内守が佐竹義重から河東田の地を与えられている。

天正18年（1590）、白河領が豊臣秀吉に没収された後、会津藩領となる。寛永4年（1627）に丹羽長重が初代白河藩主となると白河藩領となるが、寛保元年（1741）以降は、越後高田藩の榊原家の分領となった。



(2) 歴史的風致を形成する建造物

①天王館跡【市指定史跡】

^{やしるがわ}社川が丘陵を浸食した結果残された独立した丘陵が、天正年間（1467～1590）には城として利用されていた。現在も^{からぼりあと}空堀跡や^{くるわあと}曲輪跡が残されており、室町・戦国期の城跡と推定されている（『福島県の中世城館跡』福島県教育委員会、昭和63年（1988））。

頂上部には、白幡神社と牛頭天王社が祀られている。



天王館跡



縄張図

②白幡神社

天王館跡の頂上にあり、河東田の鎮守となっている。『西白河郡誌』（大正4年（1915））には、「河東田字天王下鎮座、境内百八十二坪、官有地、神殿縦三尺三寸、横四尺、破風造、雨覆方二間」と記されている。由緒は定かではないが、同書には「旧白幡大権現と称せしを、明治三年二月、今の神号に改む、本社の位置は、往昔、源義家東夷征伐の際、其陣地たり、白幡を立てし所といひ伝ふ」（古くは白幡大権現と呼んでいたが、神仏分離のため、明治3年（1870）2月からは現在のように白幡神社と呼ぶようになった。この社の位置は、遠い昔、源義家が朝廷に逆らう蝦夷を征伐に来た際、陣地とし、白^{のぼりばた}のぼりばた幟旗を立てた場所だと言い伝えられている）としている。

河東田地区の個人が所有する村絵図（年代不明）では、集落の南東に位置する田のなかに「白幡大権現」が描かれており、昭和40年（1965）代の^ほ圃場整備にともない、現在地に移転したとされている。



白幡神社



村絵図（個人蔵）

③ ^{ご ずてんのうしや や さかじんじや}牛頭天王社（八坂神社）

白幡神社と同じく、天王館の頂上にある。『西白河郡誌』には、八坂神社として記載があり、「河東田字天王下鎮座、境内七十一坪官有地、神殿縦一尺七寸横二尺、流破風造、雨覆方一間七尺、拝殿縦一間半横四間」と記されている。

また、50年以上前から現状の姿で建造物が残されており（地元民への聞き取り調査）、50年以上前の部材が現在においても使用されている（令和2年度調査）。



牛頭天王社

④ ^{あたごさま}愛宕様

白幡神社の横にある総高106cm、幅60cm、奥行60cmの小祠で、正徳4年（1714）の記銘がある。



左から愛宕様・恵比寿と大黒・不明・不明



愛宕様

（3）歴史的風致を形成する活動

① ^{かとうた ご ずてんのうさい}河東田牛頭天王祭【市指定無形民俗文化財】

^{ご ずてんのう ぎ おんしょうじや}牛頭天王は祇園精舎の守護神とされる^{しんぶつしゅうどう}神仏習合における神であり、牛頭天王を祀る信仰は京都・八坂神社に端を発する。八坂神社の天王信仰には、疫病や災害の原因として怨霊を想定しその怨霊を祀ることとでなだめる御霊信仰に基づく^{ごりょうえ}御霊会や、『備後国風土記』において疫病除けの神として登場し、牛頭天王と同一視される^{す さのおのみこと}素戔鳴尊の信仰など、様々な信仰が習合していった。その後、厄病除けのために、牛頭天王は全国各地で祀られるようになった（民俗学研究所（編）『民俗学辞典』昭和26年（1951））。

本市においても牛頭天王もしくは素戔鳴尊を祭神とする社が多くあり、神仏分離令以後の名称として、八坂神社や八雲神社に名称を変えて残っている。本市を含む福島県南部を中心とした地域では、牛頭天王社等の祭礼には、供物として胡瓜を供えるため、^{きゅうりてんのう}胡瓜天王とも呼ばれる。一般的に八坂神社の紋と胡瓜の断面が似ているからだと言われ、供え物にする。祭礼日は、祇園会が6月15日に行われていたことから、新暦の6月15日や月遅れの7月15日、旧暦の6月15日に行われているところが多い。

河東田牛頭天王祭では、6月14日を宵祭り、15日を本祭りとするが、現在は近い土日に町内会の主催で行われている。宵祭りでは境内で太鼓芸が行われる。太鼓の叩き方は、現在は1種類しかないが、昔はいろいろなたたき方があったと伝えている。

「河東田の祭りのはじまり」とも言われ、牛頭天王祭の後、愛宕様や天道念仏てんとうねんぶつ、秋祭りなどの祭礼が行われる。1年ごとに交代



牛頭天王祭

する町内会の役員が最初に担当する祭りでもあり、牛頭天王祭の後、愛宕様と天道念仏が間を置かずに行われているため、そのように称されている。

②愛宕様あたごさま

6月25日を祭日とするが、現在は近い土日に行われている。白幡神社と神社横の愛宕様に赤飯を供える。愛宕は火の神だと言われており、火伏（火事が起こらないように願う）のために行われている。

空き地に正月のしめ飾りやお札などを積み重ね燃やしなが、周囲で太鼓を叩く。牛頭天王祭と同じたたき方であるが、終わり際に全員で「わー」と声を上げることになっているという。



愛宕様

③天道念仏てんとうねんぶつ

7月24日に白幡神社で行われる行事で、境内にお棚を作り太鼓を叩きながらその周囲を回る。河東田では天道念仏とも称される。

天道念仏は、福島県や茨城県・栃木県・千葉県にかけて行われている念仏行事で、天道様（太陽）の恵みに感謝し、その正常な運行を願い、豊作を祈願する行事である。市内の代表的な天道念仏に、関辺のさんじもさ踊せきべがあるほか、板倉いたくらの天道念仏（後述）がある。

河東田では、しめ縄なを縛って、鳥居などのしめ縄の切り替えを行う。また、河東田集落の東西北の端では、竹



道切りの御札



道切りの様子



天道念仏

に挟んだお札による道切りが行われており、毎年、天道念仏の時にあわせて切り替えを行う。南方に道切りを行わないのは、「神様がやってくる方角」だからだとしている。また、東の道切りの外には、集落の共同墓地がある。

天道念仏の際には、天王館跡の頂上部にある白幡神社と牛頭天王社の境内に、四方に竹を立て、しめ縄を張った祭場が設けられ、その周りで太鼓を叩く。

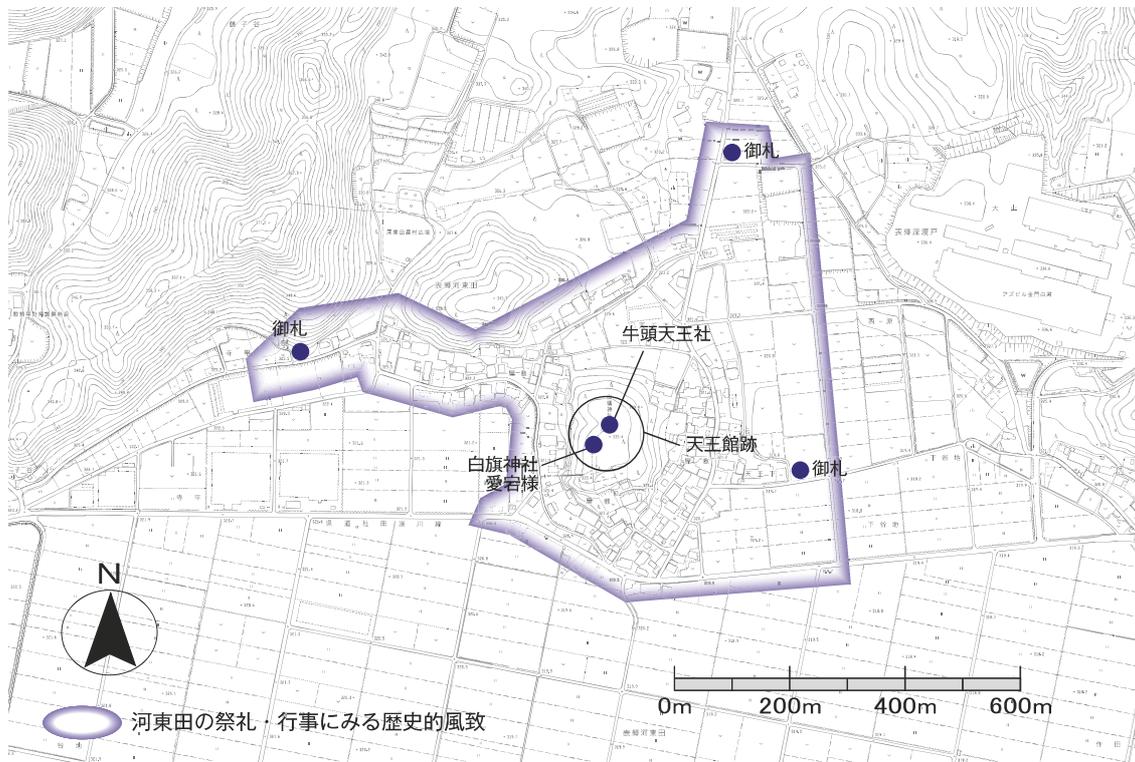
(4) 河東田の祭礼・行事にみる歴史的風致のまとめ

河東田集落は、天王館跡を中心に広がっている。天王館跡において行われる天道念仏にあわせて実施される道切り行事では、北と東西で道切りが行われる。これは集落の境界の認識を示したものだと考えられる。一方、南については神に関する領域として、道切りが行われていない。個人蔵の絵図には、現在、天王館跡に移された白幡神社のほか、稲荷大権現うかのみが描かれている。南方は集落の神である白幡神社や農業神である稲荷神たまのおおかみ（宇迦之御魂 大神：京都・伏見稲荷大社の主祭神）が鎮座する場所であるため、集落の外からやってくる疫病や悪しきものを防ぐ道切りが行われなかったと考えられる。

河東田の祭礼・行事にみる歴史的風致は、天王館跡を中心に神仏が祀られ、その周りに集落が展開した様子をうかがうことができる。河東田集落の広がり、道切りによって明示された範囲であり、その外側には白幡神社や稲荷大権現の神域や共同墓地などとともに、水田が広がっている。また、折々の祭礼・行事の際、天王館跡で打ち鳴らされる太鼓は、天王館跡を中心にした集落一円に響き渡っており、牛頭天王社や白幡神社等の建造物と相まって、歴史的風致を形成している。

第2章

歴史的風致のエリア

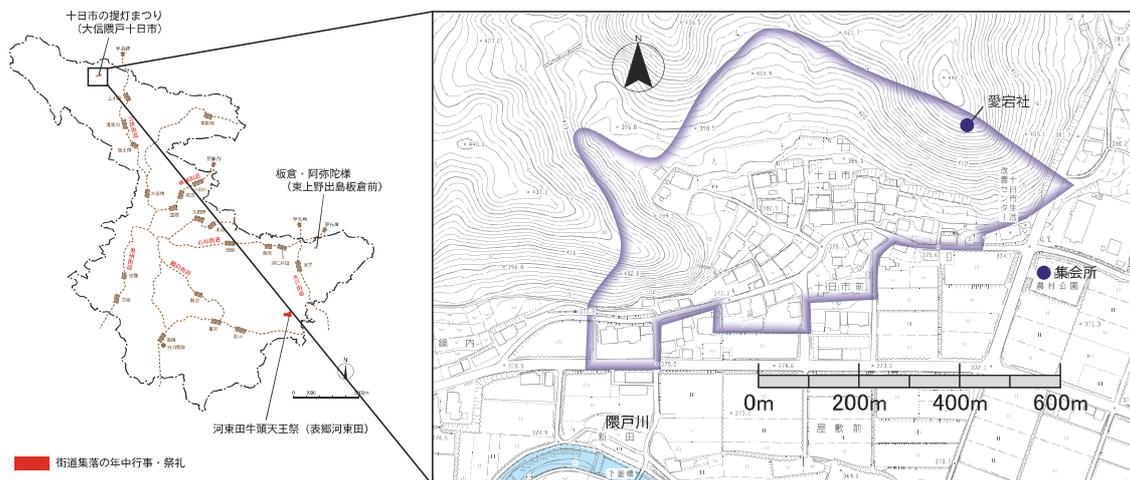


2-2 十日市の提灯まつりにみる歴史的風致

(1) 十日市集落の沿革と概要

十日市地区は、上小屋を本村とする枝村であり、上小屋村は白河・会津街道の宿場町となっていた。江戸時代には、会津街道の宿場である牧ノ内（西白河郡天栄村）での混雑を避けるため、牧之内字後藤と十日市をつなぎ、上小屋へと抜ける近道として利用されていた「後藤道」と呼ばれる道があった。近代以前には、白河・会津街道や脇道を利用し、天栄を経由して矢吹との行き来が盛んであった。明治期になると、隈戸川に沿って、上小屋—町屋—上新城—中新城—下新城を経て矢吹町に至る道路が整備されたため、主にそちらの道が利用されるようになった。

十日市集落（大信隈戸十日市）



(2) 歴史的風致を形成する建造物

① 愛宕社^{あたごじや}

集落の北東部の石段を166段上ったところにあり、小祠に祀られている。文化2年（1805）年の『白河風土記』には、「村ノ北ノ方丘ニアリ、石階ヲ登ルコト廿五間ニシテ石ノ小社アリ、祭り六月二十四日」と記されており、小祠には享保17年（1732）の記銘がある。

愛宕社を含めた小祠は、東日本大震災の影響で一部損壊したため、令和元年（2019）に補修された。現在の愛宕社は、総高98cm、幅61.5 cm、奥行61.5 cmの小祠となっている。

その他の石造物は、地藏菩薩坐像や小祠に納められた地藏菩薩像、灯笼と思われるものがある。



愛宕社



石造物群



わら燃やしの様子（左から2番目：愛宕社）

(3) 歴史的風致を形成する活動

① 十日市の提灯まつりと愛宕社

十日市の提灯まつりは、愛宕社の祭礼にあわせて行われている。夕方からはじまる祭礼の際に、子供たちが竹竿につけた提灯を持って集落のなかを歩き、祭りを主催する人たちが隈戸川で水垢離^{みずごり}をとるのが特徴の祭りである。また、高齢の女性たちによる数珠繰り^{じゆずく}が行われるなど、いくつかの要素が結びついている。

この祭り自体がいつ頃から行われているものなのかは定かではないが、前述したとおり愛宕様の小祠は、享保年間にはすでに祀られていたものであり、その頃には愛宕信仰は成立していたものと考えられる。

文化2年（1805）の『白河風土記』には、十日市以外でも愛宕社が多く祀られており、広く信仰されていたことがわかる。大信地域においては、十日市のほか、上小屋^{かみこや}、増見^{ますみ}、町屋^{まちや}、堂山^{どうやま}、上新城^{かみしんじょう}、中新城^{なかしんじょう}、下新城^{しもしんじょう}に、愛宕を祀る神社や小祠が見られる。

愛宕信仰は、京都府京都市北西部の愛宕山に祀られた愛宕権現あたごごんげんに端を発するものであり、奥宮と若宮で火の神を祀ったため、火伏の神として信仰された。また、愛宕山は愛宕修験しゅげんの道場となっており、各地の修験が信仰の伝播を主導したと考えられる。本村である上小屋の愛宕社は、明治3年（1870）の書上では、修験・常光院じょうこういんが別当であった。同院の修験者は、明治2年（1869）に還俗したとされている。

江戸時代においては、本村である上小屋の修験が中心となって、愛宕信仰を広め、また維持していたのではないかと推測できる。

② 行程

祭日は旧暦6月24日であったが、現在は月遅れの新暦7月24日前後の土日に行われている。以前は青年団（会）が主催していたが、現在は町内会の行事となっている。また、以前は6月以外の24日にも、持ち回りでヤド（注：当番となる家）を決めて集まる二十四日講があった。この二十四日講の一環ではあるが、6月の講のみ、夕方から提灯を掲げて集落内を練り歩く行事を伴う。

前日は宵祭りで、夕方、役員が自宅から一把ずつわらを持って神社に集まり、境内で燃やして帰ってくる「わら燃やし」行事が行われる。虫追いや五穀豊穰、無病息災を祈るものだという。昔はこの火を提灯に灯した。集会所に戻ると太鼓を叩いてから解散する。

本祭りの日の早朝、町内会の役員たちによって、手休めの太鼓が打ち鳴らされる。その後、愛宕社の参道・石段下で、高齢の女性たちによる数珠繰りが行われる。まず集まってきた人たちが、愛宕社に生米をささげてから念仏がはじまる。明治生まれの人くらいまでは、念仏の唱え事を覚えている人もいたが、現在は分からなくなってしまったという。

昼前から夕方にかけては、集落の交流会が行われ、引き続き17時から関係者が集合して、集会所で二十四日講の掛軸を拝礼してから、提灯行列がはじまる。若い衆が軽トラックに載せた太鼓を叩きながら、行列を誘導する。提灯を持って練り歩くのは、子供たちが中心となっている。隈戸川では、行事を主催する町内会の役員たちが水垢離をとる。その間、提灯を持った人々は、橋の上で待っている。



わら燃やし



数珠繰り



掛軸拝礼

第2章

集会所に戻ると、提灯を持った人たちは、提灯を町内会の役員に預けて順次解散となる。その後、役員を中心とした人たちのみで、提灯を持って石段を上がり、愛宕様に拝礼する。



提灯行列

時刻	行事	
	内容	場所
(前日夕方)	わら燃やし	愛宕神社
朝9時	数珠繰り	愛宕神社石段下
昼間	交流会	集会所
午後5時	掛軸拝礼	集会所
	提灯行列	十日市集落内
午後4時～5時30分	水垢離	隈戸川
午後6時	提灯行列終了	集会所
	愛宕社へ登拝	愛宕社

(4) 十日市の提灯まつりにみる歴史的風致のまとめ

十日市の提灯まつりは、十日市集落の北東部にある愛宕社の祭礼であり、提灯を持った子供たちの行列が集落内を練り歩くのが中心となっている。ただし、その行事の内容を通じてみると、わら燃やしという火祭りを伴う祭礼であるとともに、火による害虫駆除と豊作の祈願の要素も含まれている。また、祭礼を主催する町内会の役員が、隈戸川で水垢離をとってから、愛宕社に詣でるなど、比較的古い形の祭礼の形を留めていると思われる。

十日市の提灯まつりは、愛宕社での神事を中心としながら、集落のなかを愛宕の火をともした提灯が巡るなど、集落と信仰、近世から引き継がれた建造物である愛宕社の小祠が組み合わさって成立している。愛宕社などの石造物と街道集落のまちなみを背景に、愛宕社の火が太鼓とともに街道集落のなかを巡る光景が歴史的風致を形成している。

歴史的風致のエリア

